

立教大学学術推進特別重点資金(立教 S F R)

大学院学生研究

2022年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	英米文学 専攻
研究代表者 (2023年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2年		有馬 三冬
指導教員	所属部局・職名		氏名
	文学部・教授		新田 啓子
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	Hawthorne 作品における罪の感染と国家の歴史的罪		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2023年3月現 在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	文学研究科 英米文学専攻 博士課程後期課程 2年		有馬 三冬
研究期間	2022 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、Nathaniel Hawthorne の長編小説 *The Marble Faun* (1860) をメインテキストとして取り上げ、南北戦争へと突き進む当時のアメリカの政治的情况に対して、Hawthorne が作中でいかに応答していたかを考察するものである。本研究では、物語の外で罪を犯したことが示唆される Miriam が罪の感染源として機能していることに着目し、Donatello や Hilda へといかに罪が拡大していくかを分析した。さらに、罪の清算ができずに苦しむ Miriam や Donatello に対し、神父への告白によって罪を清算できたと考える Hilda の欺瞞的な態度を指摘し、本作品の楽観的な結末こそが南北戦争を正当化するアメリカへの批判となっていることを明らかにした。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 国家的罪 } { 感染 } { 南北戦争 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、Nathaniel Hawthorne の長編小説 *The Marble Faun* (1860)における感染の寓意に着目し、罪が病のようにキャラクター間で感染していく過程を分析した後、南北戦争開戦へと突き進むアメリカに対する Hawthorne の批判的応答を明らかにするものである。本作品は、開戦直前という時期に出版されていながら、アメリカ社会の直面する政治的問題を描いていないことが批判されてきた。物語の舞台であるイタリア・ローマの遺跡や芸術を詳細に描き込んでいることから、旅行パンフレットとして商業的な成功を収めはしたが、文学的価値が認められてきた作品であるとも言えない。しかし、近年ではトランスベラムという概念を提唱し、南北戦争を 19 世紀の分岐点ではなく「長い南北戦争」として捉える Cody Marrs のように、19 世紀の文学史を見直す動きが盛んであり、南北戦争との関係から Hawthorne の小説やエッセイを再検討する試みも増えている。本研究もまた、Hawthorne の「罪」の描写に改めて焦点を絞ることで、本作品が南北戦争へと至る国民的気質を捉えている可能性を論証し、Hawthorne の政治意識や *The Marble Faun* の文学的意義の再評価に貢献することを意図している。

「Hawthorne と罪」というテーマ自体は目新しいものではなく、むしろこの作家を特徴付ける中心的な主題である。彼が父方の先祖に、無実の人々が絞首刑となったセイラム魔女裁判の判事 John Hathorne をもつという伝記的背景は、「Young Goodman Brown」(1835)や *The Scarlet Letter* (1850)などの作品への影響として指摘されている。さらに、彼のキャリアの初期、1830 年代に書かれた、「My Kinsman, Major Molineux」(1831)、「Roger Malvin's Burial」(1832)、「The Maypole of Merry Mount」(1836)などの作品が、たびたびアメリカ建国の寓話として解釈されてきたように、Hawthorne は早くから国家の成立に伴う暴力の歴史を描いてきた。つまり、同作家の描く罪とは、アメリカの歴史と不可分な「過去の罪」であるからこそ、Hawthorne がまさにこれから起きようとしている戦争や新たな罪に対して無関心であったとは思えない。たとえば、短編集 *The Old Manse* (1846)の序文で、ある少年が独立戦争の契機となるコンコードの戦いで傷を負ったイギリス兵を見つけ、衝動的に斧を振り下ろし殺害した、という逸話を紹介する Hawthorne は、この事件が少年の魂をどのように苦しめたのかを知りたいと述べる。すなわち彼の関心は、罪そのものの是非ではなく、罪の意識が人にいかなる影響を与え得るのかという点にあったと考えられる。そうであるならば、南北戦争を意匠した Hawthorne の中心は、南部と北部、どちらが正当性を持つかという問題ではなく、戦争自体の有害性にあったのではなかろうか。こうした問いに基づいて、本研究では同時代的な問題意識を多分に含んだテキストとして *The Marble Faun* を再提示することを目的とする。以下、具体的な分析の概要をまとめる。

(1) Miriam の回帰する罪

The Marble Faun の舞台はローマでありながら、4 人の主要人物のうち Hilda と Kenyon はアメリカ人であり、ローマに滞在するアメリカ人で主に構成された芸術家コミュニティも登場するように、Hawthorne は意図的にアメリカを描き込んでいる。彼等がローマの遺跡をめぐる散歩をする中で、かつて多くの奴隷が見せ物として殺し合いを強要されたコロセウムを訪れる場面が示唆するように、ローマという舞台は凄惨な歴史の堆積する土地である。ローマの奴隷制への言及はアメリカの奴隷制の符牒となり、ローマという舞台はアメリカの寓意として機能するのである。物語前半の中心人物となる Miriam は、突然ローマに現れた人物で、過去を知る者がいないため様々に噂されており、語り手はそのひとつとして「黒人の血を引くアメリカ人」であるという憶測を紹介する。彼女は終盤においてユダヤ、イギリス、イタリアの血を引くことが明かされるが、Hawthorne が物語冒頭で Miriam に黒人のイメージを付与していることは、アメリカにおいて人種が帯びる政治性を本作品が描いている証左となる。彼女は何かしらの罪を犯したという意識を持ち、頑なに過去を明かそうとせず、口外することで他人を暗い運命に引き込んでしまうと考えている。さらに、彼女の過去を知る謎の男 Model が現れると、読者を含めた第三者に明示されない罪は Miriam と Model を共犯者として結びつけており、死によって逃れられるようなものではないのだと語る。この時 Model が Miriam を「奴隷“thraldom”」という言葉で表現するように、父権的な支配を逃れてローマへとやってきた Miriam が、再び隷属を強要される境遇は、物語冒頭で示唆された黒人のイメージを再び喚起する。政治的背景として、アメリカでは 1850 年に逃亡奴隷取締法が締結され、1857 年にドレッド＝スコット判決が下されており、Hawthorne はこのような情勢を加味し、過去から逃れられない Miriam に逃亡奴隷のイメージを付与しているといえる。また、Miriam の後を影のようにつきまとう Model は邪悪な性質の獣や爬虫類に喩えられており、語り手は彼の有害性を際立たせようとしているが、一方で Miriam が無実であるかどうか判断することは不可能であることも認めている。つまり、ここで問題となっているのは、Miriam が有罪か無罪か読者に判断させるのではなく、罪からは解放され得ないということである。Miriam に罪を思い出させる存在として Model を見なす時、Model という呼称は Miriam の罪の塑像であることを示す。ローマの地下墓地で Model と再会する描写は、Miriam が異境の地で自分の人生から切り離そうとした罪を、自ら掘り起こしてしまう様として解釈できる。物語の外で起きた Miriam の過去の罪は、Model として彼女の前に回帰するのである。

研究成果の概要 (つづき)

(2) Donatello の罪と感染

Model として具象化した罪は、Miriam を愛する青年 Donatello によって排除されることとなる。Donatello は無知で陽気な性格と、プラクシテレスの牧神像によく似た外見を持ち、神話的な存在として描かれる。しかし、Miriam を苦しめる Model を憎むようになり、彼がいなくなれば幸福が訪れると信じて、Model を崖から突き落とす。Donatello は Miriam の罪の塑像を排除することに成功したかのようにみえるが、ここで新たな罪が生じることで、元来の神話的な無垢さを失い、陰鬱で内省的な青年に変貌してしまう。Miriam に逃亡奴隷のイメージが重ねられていたことを踏まえると、彼女を救おうとする Donatello の変貌は、奴隷制廃止に舵を切っていくこととなるアメリカの未来を予兆しているといえる。1862, 63 年の奴隷解放宣言、そして 1865 年に北部の勝利という形で幕を下ろした南北戦争の終結は、確かに黒人を救済し、奴隷制という歴史的汚点をすずく試みであったが、新たな問題も生み出した。結局のところ、ジム・クロー法の立法化に繋がり、人種差別が強化されたように、正義の名の下に掲げられた「奴隷の解放」が簡単に人種の偏差を正す特効薬になり得なかったことは事実である。「奴隷制の影響」が現代アメリカの人種関係の説明に今もなお用いられていることは、過去の影響を断ち切ることの困難さを示しており、同様に Model の排除も Miriam と Donatello の安寧には繋がらない。Miriam が懸念していた通り、彼女の暗い運命に飲み込まれる Donatello の様子は、病が感染していくかのように描写される。Miriam は罪人のことを「空気を汚染する人物」と呼び、Model を殺して震える Donatello の様子をローマ熱に喩えている。つまり、ここでは Donatello が Miriam と罪を共有したことによって、罪という病に感染したことが示されている。彼の感染は、毒をもった虫や蜥蜴に群がられることで可視化されることとなる。最終的に、Donatello は牢獄に入ることによって法的な罪の清算を試み、Miriam は明確な罪状がないため裁かれることなく、罪を清算することができないという結末に至るが、2 人の暗い展望は、まさに Hawthorne 作品に通底する「許されざる罪」であるといえる。

(3) Hilda の楽観的な展望

Miriam から Donatello へと感染していく病は、偶然殺人の現場を目にしてしまった友人 Hilda にも拡大している。Hilda はニューイングランド出身の画家であり、清廉潔白な女性であると語られる。しかし、Model 殺しの場を見たことで、罪の意識を持つこととなり、Miriam との肉体的な接触を恐れるようになる。Miriam は Hilda の拒絶に深く傷つくが、注目すべきは Hilda が Miriam の側にいると「自分の白さが汚れてしまう」と述べているところである。彼女は Miriam の影響を受ける前に距離を置きたいと思っているが、作中で罪を犯した女性の象徴として描かれる Beatrice Cenci の肖像と表情が類似していくことによって、彼女の無垢な白さが既に侵食されていることが示唆される。しかし、Miriam や Donatello とは対照的に、Hilda はカトリックの神父への告白によって罪の意識を取り除くことができたかのように描かれる。罪の意識を衣服の染みにたとえる Hilda の言葉は、アメリカ人の芸術家コミュニティが言及する国旗の染みと対応している。散歩の道中、もしトレヴィの泉がアメリカにあったらどのような像を飾るかという会話の中で、31 人の姉妹たちが汚れた国旗を洗う像はどうかとイギリス人画家が提案する。染みを罪と読み替えるならば、国旗の染みとはまさしく国家的罪を意味しており、間もなく開戦するアメリカに対する Hawthorne の揶揄であると捉えることができる。さらに、罪の堆積するローマという土地で、芸術家たちが Hail, Columbia を歌う場面によって、国家的罪に対する彼等の楽観性はさらに強調されている。彼等と共に、自由のために流れた血をたたえる歌を歌う Hilda は、独立戦争の暴力的側面には無関心である。彼女は、フォロ・ロマーノの大地の亀裂を埋めるために英雄クルチウスが犠牲となって身を投じたという伝説に対しても、彼の愛国心を称え、悪行は善行の数で埋め合わせることができるのだと説く。このように、罪は清算し得るという Hilda の考えは、罪への感染を認めない一貫した態度の中に表れているが、それは「白さへの固執」へと連動していく。彼女は Kenyon の求婚を受け入れ、Miriam や Donatello を残してアメリカへ帰国することを決める。Kenyon は物語を通して Hilda に対し崇拝に近い好意を抱いており、4 人の中で唯一罪に関わることなく、Hilda が無垢であると信じ続けるため、彼女の白さを保証する人物となり得る。しかし、結婚という言葉は、Miriam と Donatello が Model 殺しの共犯となった時、“It was closer than a marriage-bond”という表現の中で使われており、すでに罪の影が投じられている。Hilda の「白さ」への固執、そして Kenyon の「白さ」への信奉は、まさに「国旗を洗うアメリカ」の姿を体現しており、2 人を結ぶ「白さ」の欺瞞を露呈しているのである。物語結末の視点は Hilda に託され、希望に満ちた予感をもって締めくくられるが、彼女の向かう先は南北戦争の始まろうとしているアメリカである。ここに、Hilda の楽観的な展望は、作家 Hawthorne の痛烈な皮肉の描写であるという解釈が成立する。南北戦争がいかなる正当性を持ち得ようとも、「許されざる罪」として必ず人々の心に回帰し、無垢な白さを持ち続けることはできないことを、作家は *The Marble Faun* を通して描いているのである。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください (紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① Arima, Mifuyu. "The Fluidity of Narrative Authority: Poe's Authorship in *The Narrative of Arthur Gordon Pym*." *The Journal of the American Literature Society of Japan*, no. 21, 2023, pp. 1-17.

② 該当なし。

③ 該当なし。

④ 学会発表

1. 有馬三冬「人種的〈他者〉の抵抗—ツァラル島における言語的支配の転覆」日本ポー学会第13回年次大会、2022年9月17日(オンライン)。
2. 有馬三冬「国家的罪の継承と南北戦争—*The Marble Faun*における感染の寓意から」立教英米文学会立教英米文学会、2022年12月17日開催(立教大学池袋キャンパス 太刀川記念館三階多目的ホール/オンライン)。